
東方神々録

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方神々録

【Nコード】

N4588N

【作者名】

燐

【あらすじ】

遂に舞い降りる最悪で最強で最狂の破壊神とその使い魔そして……自分の信念を貫くことを決意した幻影の現人神……幻想の世界で彼等の目には何が写るのだろうか……それは誰にも分からないかもね

第一話：最初からクライマックスだぜ！！！！（前書き）

作者「ようしやあ！！！！頑張るぜえ！」

第一話：最初からクライマックスだぜ!!!

こんにちは……この物語の主人公でも副主人公でもある幻影の現人神……紫乃崎 紅です

……早速ですが俺達の仲間……とゆうより親友の使い魔……

《轟覇龍皇》アカムトルマのティムさん

《天神龍帝》バイスロストのアリアさん

《邪神》のイクスさん

……そして、自分の親友である

全ての世界の神を治め全ての世界を管理、監視する神……世界の一角……全ての世界の万物すら破壊することが出来る……《破壊神》夜天空……

バチバチ

龍神が天に向かって咆哮すると稲妻が走り幾つもの雷霆が降り注いだ

「歪め……空間！」

空は空間を歪ませ幾つかの剣を取り出すと雷霆に向かって投げた

トゴゴゴゴゴ
ンンンンンン
！！！！！！！

空が投げた剣は雷に耐えられず爆発したが空はそれをお構い無しに龍神に突っ込んだ

「全ての暗黒 絶対の力 今ここに 闇の力 全て飲み込み全て滅
する終焉の時 永久へと消えよ

『カオス・ファイナリティ』
「!!!!」

黒い漆黒の大剣が異空間より呼ぶ出した
空はそれに更に魔力を纏わせ投擲した

「グハア……人間……如き……が……私を……龍神……を……舐める
なあ……」

黒い漆黒の大剣が龍神の背中を捉え突き刺さり口から吐血しながら
龍神は先程より何重にも重ね雷を放った

「……さて、何でこんなことになっているか……少し時間を遡
ろうか

それは約20分前のこと……

「……地球」

「……ふむ…みんな…こっち」

「えっ？う、うん」

空はいきなり何処かに歩き出した

数十分ぐらいだろうか……森林を何処に向かうか分からずに歩き回って

「空………何処に向かっているんだ」

「ん？秘密」

「………はあ」

「何てね着いたよ」

「………うわぁ」

森林を抜けた場所は丘だったしかもそれなりに高い場所で辺りを一面見張れる位広かった
そして……何よりも美しい緑で埋め尽くされた木々が立ち並んでいた

「へへ中々自然が生い茂るとかだな……」

「そうですね……綺麗な青空」

「素晴らしいです」

イクスさん達も同意見のようだ
因みに上からティムさん、アリアさん、イクスさんです

「?……何で空はここに丘があるのが分かったんだ?」

「うん? ああ……俺は空間魔法とか得意でね空間認識魔法で軽く辺りをサーチしたんだ」

「……この広い森を?」

「5秒あれば半径10kmのことは代々分かる」

「……………」

えっ？あの唸っていた時？確かに5秒位だったかもしれないかも…
…半径10kmを？…流石世界神の一角…

「イーエーイ♪」

えっ！？まさか…読心術とか…出来るのか？

「そ・の・ま・さ・か♪」

「……………」

「ニコニコ♪」

「やっぱし……空は凄いな……」

「それでも俺は全ての世界を管理、監視する世界神の一角だよ？これくらいは出来ない」と

「はぁ……」

改めて自分の親友のスペックに驚かせられたよ……

「それにしても……綺麗な青空」

空は天に手を伸ばした……勿論その手に掴めれる物は何もない……でも……そんな意味の無い行動でも空は微笑みただ空……見ていた

「……っ！？空様」

いきなりアリアさんが顔を真っ青にして空を呼んだ……何かあったのか？

「分かってるよ……」

「……どうしたんだ？」

「“此方”の神様が来たんだよ……それもアリア達と同レベルの龍だね」

「なっ……何だって！？何で……」

「彼方からしたら俺達は神聖な場所に無断で入り込んだ……不届き者……なのだろうね」

「……空は神なんだろう？」

同じ神であろうとも空は最上高位の神だろう？何で不届き者なんだ？

「あれ？俺言って無いっけ？通常モード……ま今の時は俺は一切の神力を封じているんだよ」

「……マジか」

「マジマジ……さてと」

空はニヤリッと笑いながら腰に指している刀に手を掛けた……えっ？

「えっと……空……まさか……」

「いや……此方の神…神力の量からして神の中で上位にいくものと見た……さてどの位の實力なのかな♪」

……駄目だこれまるで小さい子供に玩具を挙げるたような顔だ……イクスさん達に救助サインを送ると……………

イクスさん⇨諦めの目を向けられた

ティムさん⇨俺もやりてえなあ↑気づいてない

アリアさん⇨空様……素敵です↑恐らく気づいていると思うが無視

「……………はあ」

普通人人（神& a m p, 龍）はこのメンバーだとイクスさん以外居ないのかな？

その時……

ゴロゴロ……

綺麗だった青空を覆い尽くす雲……そしてそこから……顔出す巨大

……これは最終警報だ……もしこれを破れば“死”が待っている……
…そう確信した

だが……その状況でも

「それがどうしたんだ……？」

空はかなり挑発的な顔で腕を広げ無防備な状態でに笑った

「貴様は……死にたいようだな……！」

ゴゴゴゴゴゴ……

凄まじい神力が龍神から放出された……普通の人間ならまずその殺
気と神力に気絶するだろう……だが空はただ笑っていた玩具を譲ら
れた子供のように……笑っていた

「さて……行きますか！」

そして真っ白いコートを羽ばたかせ空は龍神に突っ込んでいった……

そして冒頭に戻る……と

「へっ！」

空は何重にも重ねられた雷を搔い潜りながら龍神との距離を摘めていった

「……さて……これ以上は紅が心配だから……」

空はその場で止まりゆつくりと目を閉じた……戦いの間で目を瞑ること……それは自殺行為と一緒にある

「死ねええええええええええ！！！！！」

「……ボソツ」

龍神の放たれた雷は真っ直ぐに……蝶蝶なく……空に直撃した

「あれ？紅聞こえなかったのか？空が雷に直撃する前に何か呟いたのが見えたか？」

そう言えば……聞こえなかったけど何か呟いたような……

「まあ……見て見ろよこれから……あの龍神がボツコボツコにされるぜ♪」

「フハハハ……我に逆らうからだ……」

龍神は笑う……目の前を不届き者を殺ったことに……でも相手が悪かった……それが空でなければ……殺れていたかもしれない……空が雷に当たる瞬間に呟いたのは……最悪で最強で最狂の姿に言葉……

[illegible]

「フハハハ……ハッ？」

龍神は気づいた雷があの不届き者に直撃した場所に……“ありえない”程の神力を感じたからだ

天が響く地が轟く……まるでその者ものの誕生を歓迎するように……

「なっ……何なんだ!? 何なんだこの……神力は!?!」
ねえ……一つ……教えてあげるよ

「?！」

“ありえないことは……ありえない”

「……………」

思わず口を開けた龍神……呆然とした……“ありえない”あの……あの……この全てを“破壊”するような“禍々しい”神力を出せるのは……この世……嫌……この全世界で一人……世界神の一角……破壊神……！！！！

「仮にもこの姿になったんだ……楽しませろよ？龍神」

「まっ……まさか……あなた……いえ、貴方様は！？」

「さあ……お前の鎮魂曲^{レクイエム}を奏でろ……！」

黒髪黒眼の破壊神はここに……地球……に舞い降りた

紅「うおおおおおいおい！！！！」

作者「次回お楽しみに後、感想などが送ってもらえると嬉しいです
……では……さようなら」

紅「結局何の為にゲストに呼ばれたのか意味不明だった……」

第二話：最後はちょっとショボい？（前書き）

作者「短いですが……よろしく願います」

第二話：最後はちょっとショボい？

「バッ……バカな何故貴方様が!？」

「そんなことはどうでもいい……お前の実力……精々見せてもらう……!」

先程よりも数十倍の早さで空は龍神に突っ込んでいた龍神は余りの速さと驚きに只狼狽していた

「オラァ!!!」

「グアアアアア!!!」

先程とは違い魔力だけでなく神力も混合で強化された拳は龍神の顔に振れ込んだ

「ガハ……ぐううう……」

「遅い!」

「ガハッ!?!?」

「修羅光神拳!?!」

目にも留まらない拳の嵐は全て龍神に叩き込まれた

「……………」

最早体勢を整える暇もなくうめき声を言う体力も無い意識があるのかすら分からない……龍神

「全ては破壊 全ては破壊 全ては終焉へと誘え……終末の光!?!」

空の手に破壊、破滅、終焉、を誘う莫大な魔力が集束していく……それを見ていた紅&#38;使用魔一同は……

「ねえ…あれもう止めを指してない?」

「……………大丈夫、空様なら……大丈夫です」

「まあ……死なないだろう…仮にも龍だし不老不死だろうし」

「最悪の場合でも……半殺し以上でしょう」

「（普通に怖いんだけど……）」

紅は内心本当に空が龍神を殺してしまいそうで密かに龍神に念仏を唱えていた

「『エンド・オブ・ザ・シヴァ』!!!!」

莫大な魔力は巨大な魔砲となり龍神を飲み込んだ……

「やり過ぎちゃた……テヘエ☆」

「お前は……バカかあああああ！?!?!?!?!?!?」

ゴ
~~~~~  
ン  
!!!!

「痛いゝゝ暴力反対!!!!」

取り敢えず俺は空の頭に拳骨を叩き込むことにした

「先程まで一方的暴力を公使したのは誰だあああ！?!?!?!?」

!?!?!?!?

「二方的な暴力じゃないよ……あれは……う……ん……正当防衛だよ」

「正当防衛？違うだろ確かに正当防衛かも知れないけどあつちらは威嚇だったぞ！！！！」

「まあまあ……落ち着いて」

「それに何で『エンド・オブ・ザ・シヴァ』を使うんだよ!?!? 危ないよ! もうすぐで巻き込まれる所だったぞ!?!?!?」

空が放った魔法は龍神を飲み込み更に地面に直撃しそこで爆風が発生し紅達の場所まで飲み込んだのだ勿論紅達はそれを詠んでいた  
ので回避したが……

「紅……“終わり良ければ全へ良し”何だよ……うんうん便利な言葉  
」

「はぁ……怒る俺がバカらしくなってきた……」

「♪~~~~♪」

口笛を吹いている空は放つというに龍神は先程の超広範囲殲滅用破壊魔法『エンド・オブ・ザ・シヴァ』をまともに喰らってしまい気絶している……やりすぎだが空もある程度は手加減していたようだ

「イクス、龍神の様態は？」

「はい、空様の手加減合ってかそろほど重傷ではありません数分後には目覚めるでしょう」

「成る程……了解」

「なぁ……空」

「何？」

「これからどうするんだ？」

「ここに……住もうかな……」

……

……

……

……

•  
•  
•

「はいはいはいはいはいはいはい！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

「おお……ナイスリアクション！」

「いやここ一応龍神の土地だから神聖の場所だから分かってる？分かってるの？空お前仮にも最高位の神だろ神が神の土地を取っていいのしかもお前えかなり酷いことしたの自覚しているの？自覚してないのバカ？バカなの？」

「そこまで言う必要無いじゃないか……グスツ」

「あっ……いいす」「貴方……空様を泣かしましたね？」……ガタガタガタ  
（超汗）」

何故だろう今俺の本能が後ろを向くな向いたら死ぬと叫んでいる……  
 ……そうだったイクスさんに言われたんだ………

「紅様、冗談でも空様を泣かせた場合……大地と天空が怒りますよ」

「空（様）を泣かせやがった（ました）……お仕置き（拷問）タイムだ（ですよ）……ニコッ」

ああ……そっか大地と天空が怒るって……こう言うことだったのか……はは……命運尽きたか……いやこれは正に“口は災いの元”だな

俺が最後に見たのは……紅蓮の炎と白銀の氷だった



「あれ？紅は？」

「天空と大地を怒らせました」

「……………そう」

さて……………なんかこの世とは思えない断末魔が聞こえるけどスルーしてと……………龍神にはこの地を貸してもらいたいんだよね……………あつ……………別に追い出す訳じゃ無いよ！俺も流石にそこまで鬼じゃないし

さて……………龍神はいつになったら起きるのか？

## 第二話：最後はちょっとショボい？（後書き）

作者「短いですが第二話終了……そして今回のゲストさんは“轟覇龍皇”アカムトルマ：愛称はティムさんに来ていただきました」

ティム「宜しく頼むぜ♪」

作者「所でティムさんは日常生活で何をしているんですか？」

ティム「ん？ そうだな～洗濯やら掃除とかだな……あつ空によく紅茶とか淹れてるぜ」

作者「言葉遣いから想像できないぐらいの家庭的ですね……」

ティム「おいおい（汗）これでも世界神の一角の使い魔様だぜこれぐらいは当然当然！」

作者「……そうなんですか」

ティム「他には？」

作者「それでは……ズバリ好きな人は!？」

ティム「勿論我が主の空だぜ!／／／」

作者「……主従の恋愛はやバイんじゃ……」

ティム「そんな常識ぶち壊してやるぜ!」

作者「アハハハ……(汗)」

ティム「おっと……空が呼んでいるから行くぜ……それじゃあな次回もよろしくな!」

作者「ついでに感想など送ってくれと嬉しいです」

ティム「じゃあな〜」

作者「次回もお楽しみに〜」

### 第三話：住む場所決定！！！（前書き）

作者「すいません宿題やら宿題やらでバテバテしていました……相変わらず短いですが……よろしく願います」

※今回は紅視点で紅と使い魔一同は喋りません空と龍神のみです

### 第三話：住む場所決定！！！！

太陽の光を遮断した雲……そして俺達の前には要約起きた、龍神とその龍神と話している……我が親友“夜天 空”がいた

「龍神……もうメンドクサイからこれから“蒼”って呼ぶね」

どうやら、龍神の瞳は蒼かったことから勝手にあだ名を付けたようだ

「う……む、分かったそれで何故貴方様がここに？」

「ん……何となく？」

空……本当に自分の立場理解しているのか？

お前はどの世界でもどんな神でも崇拝するぐらいの神……世界神なんだぞ？

そんな奴がいきなり自分の土地に来て間違いを犯し攻撃してしまっ  
たんだよ気まずいのレベルじゃないよ？

「そ、そうでしたか……」

………どうやら、龍神…改め蒼さんはどんな大要を行ったらいい  
か頭を抱えているぞ内心

「そんで……頼みたいことがあるんだけど……いい？」

「私めに出来る範囲なら……」

「ん……実は…この地に住ましてくれないかな？」

「ええ……その程度な………えっ!？」

いきなり蒼さんは仰天した

自分より偉い神様がここに住ましてくれ……普通なら仰天するのが  
当たり前だろうな

「やっぱりダメ？」

「いいい、ややや、そつ、そんなことは無いですよ!？  
少し吃驚しただけですよ、ハイハイ」

蒼さん……何か可笑しくなっているどうやらもう大要仕切れない様  
だ……空が相手だしな……何やるとか全く予想つかないからな……

「な、何故このような土地に？」

「ここが気に入ったからここに棲むそれ以上でもそれ以下でも無い  
よ」

何か……もうここに棲むって決めてるよ最初は悩んでいたのに

「君の用な強い龍が居たからこそこの地があるここの自然がある……  
…自然好きでしょ？」

「……………はい」

もう最初の威厳も殺気もないな総崩れだな……

「だからこそ君はこの地に人間を遠ざけた……人間は穢れた動物だ  
からね分かるよ……」

「……世界神様は何でもお見通しですね」

「フフ……君よりは長生きしているし色々な経験をしたからね♪」

「フフフ……」

「アハハハ♪」

どうやら上手く和解したようだ……これは空、計算通りかそれとも天然か……後者か……空の性格からして

「そうそう……いい忘れていたけど俺の名前は夜天 空」

「龍神……と名乗っています」

「で……話は戻るけどこの地に住ましてくれないかな？」

「ええ構いませんよ」

「ありがとう」



と、空は小さく頭を下げた

「夜天様！そっ…そんな頭をあげてください！」

驚くだろうな……自分より偉い人が真っ正面から頭を下げたんだもん

「フフ……凄い慌てようだね、頭一つで」

「とっ…とんでもない！」

「まっ…取り敢えずこれから宜しくね蒼♪」

「はい……よろしく願いします夜天『空』えっ？」

「空……全て見渡せ全て見守る空…それが名前」

「えっ？.えっ？」

「名前で呼んで……上の名だと距離を置かれているみたいで嫌いな

んだ」

空らしいな……全て見渡せ全て見守る空か……空らしいや

「……クスッ……分かりました空様」

「うんうん……蒼……君を我が“友人”として招くよ」

「ありがとうございます……世界神の一角……“破壊神” 夜天 空様  
……貴方の誘いを大変快く承けたまわします」

「これからもよろしくね」

「はい……ようこそ我が神聖の場所“幻想卿”へ……」

こうして俺達は蒼さん……の土地……幻想卿に住ましてくれることになった……でも家はどうするんだろう……まっ……空のことだしこんなことぐらい考えて「家どうしようかな……」……これからの生活  
凄く不安になってきたな……

### 第三話：住む場所決定！！（後書き）

作者「相変わらず短いですが取り敢えず今回のゲストさんは《龍神》の蒼さんです」

蒼「龍神です皆さんこんにちは」

作者「蒼さんは何時もは威厳たっぷりですが素は紳士ですね」

蒼「しんし」と言うのは知りませんが礼儀正しい方が話しやすいのです」

作者「成る程……蒼さんは自然がお好きなのですか？」

蒼「ええ……あの大地は私が見守りながら育ちました」

作者「人間がお嫌いのようですが……」

蒼「はい……実はこの頃人間達が高い四角の大きな建物を立ち上げるために森を切っていくです……その為にそろそろ人間達に警告しに行こうと思ったら……」

作者「空達がやってきて……やっちゃったと」

蒼「……はい」

作者「アハハ……生きとして生きる者は失敗一つや二つはあるさ♪」

蒼「そうですが…流石に相手が……」

作者「過去を悔やんでも仕方ないさ〜」

蒼「そうですか」

作者「そうなんです、さて…こんな調子で次回も〜」

蒼「よろしくお願いします」

## キャラクター紹介（前書き）

作者「キャラクター紹介です

一気に全キャラクター紹介するのは大変なのでまずはこの物語の主人公と副主人公 夜天 空、紫乃崎 紅を紹介します」

## キャラクター紹介

夜天ヤテン  
空ソラ

身長.. 168 cm

体重.. 59 kg

年齢.. 推定100億以上？

種族.. 神（破壊神）

能力.. 能力.. 全てを破壊する程度の能力（通常時）

全てを完全に破壊する程度の能力（神化時）

終極の破壊を司る程度の能力（終極神化時）

魔法を使う程度の能力（ありとあらゆる魔法を使う）

空間を操る程度能力

全ての神と世界を統べる世界神の一角：破壊神でこの小説の主人公？  
その力は絶大で神力を使わなくても龍神を圧倒するほど……能力は  
全てを破壊する程度の能力……その気になれば相手の能力ですら破  
壊可能しかし一時的なので一時間もすれば使えるようになるだが神  
化もしくは終極神化の場合は破壊された物は一生戻ることは無い  
基本的には平和主義だが何かと興味を抱くものには徹底的に首を突  
っ込む  
容姿は腰まである金色の髪とぱったりと開いた銀色の目そして10  
0人いたら100人が美少女と言われる程のスラリとした体型と顔  
つき……だが残念ながら空は“男”である（本人も結構気にしてい  
る）

紫乃崎 シノザキ 紅 コウ

身長…170cm

体重…60kg

年齢…100歳以上らしい

種族…現人神（吸血鬼）

能力…幻影を司る程度能力（通常時）

幻影を具現化する程度能力（吸血鬼化）

世界の負を吸収し力にする程度能力（闇の刻印時）

森羅万象を支配する程度能力（闇の刻印&吸血鬼化）

基本ツツコミキャラ役のだがその力は空に少し劣るが間違いなく最強クラス

世界の負を吸収する邪法、闇の刻印エレボス・カープを使うことが出来る

元は人間だがとある出来事（前作）により現人神（空の従者）になった

通常時は幻影を操り敵を翻弄させるのが得意

吸血鬼化は幻影を具現化出来るので敵の幻影ですら作ることが出来る正しこの時紅は吸血鬼なのでニンクなどに弱い更に体にかなり負担が掛かる



闇の刻印時は圧倒的な力で敵を圧倒するがそれと同時に吸血鬼化とは比べなら無い程の体に負担が掛かる更に世界の負を吸収して力を得るので時間が経過するほどに力が増すがそれと同時に世界の負に耐えなければ負に吞まれ暴走の恐れがある

最後は闇の刻印と吸血鬼化を使った『アカシック・オブ・バンパイア』だがこの姿は使ってしまった数分でも三日は意識不明で倒れるほどの負担が掛かる今は余りに危険なので空から禁止されている

#### **第四話：住む家と空との模擬戦（一方的にボコられます）（前書き）**

作者「相変わらず駄文です！！！」

誤字等ありましたらご報告していただくと大変ありがたいです！  
それではスタート」

#### 第四話：住む家と空との模擬戦（一方的にボコられます）

今、俺は死にかけています

………：すいませんいきなり言われても分からないと思いますがとにかく俺は生と死の境界と言う紐の上を歩いています……原因？それは空との模擬戦です……それも……

「一方的虐待だあああああ……！！！！！」

「ほくくら、ほくくら、頑張って避けないと死んじゃうぞ♪」

ドガガガガガガガガ！……！！！！

空の回りには空間が開けられそこから様々な剣が発射されていた

「くうううううう！！……？？」

ブリューナクで弾くものの何分数が多すぎる！多分一秒で100本は発射されているし……！！

「ガンバ、ガンバ〜♪」

紅「お前は悪魔か————!!!!???.?」

何故俺が空と模擬戦（一方的虐待）しているのかはほんの数分前に遡る……

「それでは空様また私は空の上にありますのでもし困ったことがあったら何時でも呼んでください」

「ん……分かった、ありがとね」

「はい、それでは……」

交渉は上手くいき空と俺達はこの地に住むことになった  
蒼さんはその巨体を大きくくねらしながら天に昇っていった

「それにしてもデカかったな……あの龍神」

「そうですね……」

ティムさんとアリアさんは同じ龍なのか蒼さんが天に昇る姿をじつと興味深そうに見つめていた

「なあ……空」

「ん……?」

「家……結局どうするんだ?」

「あ……、其なんだよね……問題点第一号は」

……他にもあるかよ

「無いよ言ってみただけ」

そうだった……こいつ読心術が使えたんだ……場所は決まってるのか?

「場所はこの先ちょっと行ったところに平野があるからそこにする予定」

「それも、空間認識魔法か？」

「そうだね、蒼と話しているときに粗方調べたからね」

「うん……本当にお前、あれだ……不可能と言う言葉は存在しないのか？」

「あるよ……未だにクロウに勝てないし父さんにも勝てないし」

「……………」

あの二人……そんなに強かったのか？

……あれ？星輝様は？

「一応、姉さんには勝てるよ」

紅「言うことは空の強さはアルゼント様含めN O. 3か」

空「N O. 3……何か微妙なんだけどね」

紅「ややややや、空は十分強いよ」

等と空と紅は雑談していた。だが忘れてはいけなだろうか……家のこと

「あの……空様？」

「ん？」

「家のことは？」

……

……

……

……

…

「あっ……忘れてた」

「……………」↑使い魔三人の冷たい目

「えっと……それじゃあ！少し考えるから少し待って」

空は両手の人差し指を頭に付けムムム……と唸り始めた…一瞬可愛  
いと思ったがそんな考えk「よし！」……思い付いたようだ

「元界から“アレ”を持ってこよう……」

「“アレ”？何だそれ？」

「“アレ”ですか」

「“アレ”か……」



「“アレ”ですね」

……どうやら俺しか知らないみたいだ  
何だろう？ “アレ” って

「紅は“アレ”は俺の……家？、まあ…俺の趣味で作った屋敷だよ」

趣味で屋敷を普通作るか？……よく分かん

「とりあえず今から元界に作ってある屋敷と平野の土地の空間を繋  
がせるからちよつと平野まで行ってくる」

「私も行きます」

「俺（私）も行くぜ（行きます）」

「じゃあ……俺もついて行くよ」

空「それじゃあ、付いてきて」

フワリと空は浮かぶと何処かへ飛んでいったイクスさん達と俺も空を見失いように付いていった

そして……数分後……

「ここら辺だね」

空達の前にはそれなり広い平野が広がっていた

「でっ……どうするんだ？」

「まあ……見ててよ……歪め空間……！」

空が平野に手を向けると平野の一部が消え何も無い空間が出来た

「……………」

空は目を閉じ静かに呟いた

「我が望む我が願う空想よ具現化せよ」

何もなかった平野の一部に突如昔の風味を出した大きい屋敷が姿を現した

「凄いな……これも空の空間魔法？」

「そうだね……イクス、ティム、アリア……済まないけど」

「分かりました」

「久しぶり大掃除だぜ」

「分かりました」

イクス達は先に屋敷の中に入っていった

「?どうしたんだ？」

「いやゝゝ恥ずかしい話作っておいてずっと使わずじまいだったんだよねだから埃まみれ確定だからイクス達に大掃除を頼んだわけ」

「俺達はやらないのか？」

「いや……俺達は俺達で殺ることがあるんだよねゝゝ」

……殺る？何を……そう呟こうとした直後

シュ……

ツウウウ……

空気を切る音と同時に紅の頬から赤色の液体が流れた

「俺の“殺る”は戦いのサイン……だよ覚えていてそんはないよ」



ない勝てない勝てない勝てない勝てない勝てない勝てない  
勝てない殺される？殺される？殺される殺される殺される  
殺される殺される殺される殺される殺される殺される殺さ  
れる殺される殺される殺され殺される殺される殺される殺  
される殺される殺される殺される殺される殺される殺され  
るーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！

「ああああああ！！！！！！！！！！」

ブスッ！！！！

紅はブリューナクを自ら自分の足に刺し自分の体から恐怖を痛みで  
相殺した

「グッ……」

ブシャ……

紅は恐怖を痛みで相殺したのを感じ足から引き抜いた

「痛みで恐怖を相殺する……成る程ねさて始めよう！  
紅！これは模擬戦だけど己の技術己の力を全てを炙り出せ！  
じゃなきゃ……怪我だけじゃ済まないよ！！！！！！！！」

今……神VS神の戦いが始まった

「先手必勝！真名開放！！！」

「……轟く五星<sup>プリューナク</sup>！！！」

紅から投げられた一つの槍……だがそれは五つの光となり雷の軌跡を作りながら空に向かった

「へへへなら此方は！絶世の名剣<sup>デュランダル</sup>で行きますか！！！」

空は抜いたのは一振りの長剣……だがそれは美しくまた覇気を放つ絶世の名剣<sup>デュランダル</sup>その剣に断ち切れるもの無し

「ふっ！」

ガキンガキンガキーン!!!!!!!!!!

五つの雷の槍はその剣に全て弾かれた……だが……

「『イヴル』！」

この言葉と同時に五つの槍は意志を持ってるか用に再び空に迫る

「あゝ、それがあったか……けど………はあっ!!」

ガキンガキンガキーン!!!!!!!!!!

空も負けじとデュランダルを振り再びブリューナクを弾いた

「ちっ…『イヴル』！」

再び紅の手元に五つの穂がある槍ブリューナクが戻った



轟く五星実は生きていて意思を持っており、『イヴル』と唱えると自動的に敵に向かって飛んで行き、再び『イヴル』と言うと手元に返って来る能力がある……と空に教えてもらった

「（やっぱり、ティムさんやアリアさんとは次元が違う……！）」

「考え事してる余裕があるのかな？」

いつの間にか聞こえる……目を剃らしては居ないのに……消えたことさえ気づかなかった……“ 先程前真っ正面に居たのが真横から聞こえてくる”

そう思考した直後横腹に衝撃が走った……恐らく蹴られたんだろうか……そのまま紅は地面に激突……

「するか……！！！！」

紅は空中で無理矢理体勢を整えて地面に降りた

「♪~~~~♪~~~~」

空はそれを見て鼻歌を吹きながら笑っていた……だが紅はその笑顔が悪魔の笑いにしか取れず顔を引きつっていた

空も紅の引きつった顔を少しまた笑うと空の回りには空間が開きそこから数十本の剣が顔を覗かせた

そして冒頭に戻る……

「ぐっ……!!」

「ほくくら、ほくくら♪」

子供をあやすように笑い言いながら凄まじい剣の雨が紅を襲う

「紅蓮の嵐炎！ 全てを呑み込む 塵とかせ！！ 『フレア・トルネード』！！！！」

紅も負けじと魔法を放ち剣を吹き飛ばしていく

「む……」

剣の雨を吹き飛ばしていく炎の嵐は空おも呑み込もうとした

「自然の摂理 我に従い 我を守る盾となれ 『エレメンタル・シー

ルド』」

空も魔法の盾を張り炎の嵐を防いだ

「（守ったら負けだ！攻める！！）  
星々の輝きよ 蒼穹を走る光となれ！『シューティング・レイン』  
！！！！」

更に紅は魔法を発動させた天から降り注ぐ光の雨……空はデュラン  
ダルを空間に戻し自らの腰に掛けている血刀・終夜を抜いた

「甘いー甘い！！」

光の雨に空は突っ込んでいった自分に当たるのだけを切り裂き紅に  
突っ込んでいった

「魔神終焰斬！！」

大きな黒い漆黒の焰を終夜に纏わし空は紅に切りかかった

「ツツツー……！！！！！！！！」

ガキンッ！！！

「!？」

終夜が纏った黒い漆黒の焰は防がれたそれは紅のブリューナクでは  
無い……それは紅の中でも最強の剣……鮮血に染まった約束されし勝  
利の剣だった  
ブラッディ・エクスカリバー

「はあああああ！！！！」

ガキンッ！！！！

紅は力任せに空を吹き飛ばし更に紅は空に切りかかった

だが……紅は忘れていた……空も持っていることを

ガキンッ！

「っっ！」

「本当にやるよ紅…けど力任せじゃ俺には永遠に勝てないよー！  
！！」

「うっ……！」

その紅の渾身の力を込めた一撃は空の持つ剣に防がれた

お返しとばかりに紅の腹には蹴りを叩き込んだ

紅の渾身の一撃を防いだのは空の持っている剣の中で最強クラスに入る永遠に約束されし勝利の剣だった  
エターナル・エクスカリバー

「ぐっ……ゲホゲホ！」

何とか再度空中で体勢を整えるがもろに入った蹴りのせいかダメージが多く紅は血を吐いた

「ハア…ハア…ハア……！」

「これで…終わり……かな？」

「まだだ……まだだだだあああああ！！！！！！」

ゴゴゴゴゴゴ！

紅から莫大な魔力、靈力、妖力、神力が放出されその影響か天は響き地は轟き始めた……それはまるで天と地が紅を恐れ拒絶しているかのようなだった

「フフ……♪」

[illegible]

紅から放出された莫大な力は鮮血に染まった約束されし勝利の剣に  
ブラッディ・エクスカリバー

「それでこそ紅だ！流石に俺もあれはきついから！《神化》……！！！」

空の目と髪が漆黒に染まった直後、紅とは比べ物にならない莫大な神力が溢れだした

エターナル・エクスカリバー

溢れだした神力は永遠に約束されし勝利の剣に練り込まれていった

「これで最後だあああああ！……！！！！！！」

「来い！己の全てを賭けて……！！」

「鮮血に染まった……《ブラッディ》」

「永遠に……《エターナル》」

「約束されし勝利の剣……！！！！！！」  
エクスカリバー

赤黒い鮮血の全てを呑み込む極光と  
紫の世界すらも呑み込む極光がぶつかり合った

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

.....

徐々に赤黒い鮮血の極光が紫の極光を呑み込んでいった

[illegible]

更に紅は力を含める自分の全てをこの……一撃に！

.....

空は静かに目を閉じた……。そしてもう一度頭上に剣を戻し目を開いた瞬間……。放り下ろした

「アアアアア……？」

途端に赤黒い鮮血の極光は紫の極光に切り裂かれ紅おも呑み込まんと近付いていった……



「……………」

紅は静かに目を閉じ始めたそして思った

負けたけどまた頑張ろうと……

紅が最後に見たのは紫の極光に呑み込まれる瞬間……空はお疲れさまと呟いた所だった

#### 第四話：住む家と空との模擬戦（一方的にボコられます）（後書き）

作者「相変わらず下手な駄文を書く作者こと憐です」

作者「残念ながら今回はゲストさんは居ません……と言うよりネットゴフンゴフン！」

作者「とりあえずそう言うことです  
申し訳ありません」

作者「予定では遂に次回原作キャラが出る予定です  
お楽しみにしていただくと凄く嬉しいですあと……感想などを送って  
くれると凄く嬉しいです」

作者「それでは!!」

## 第五話：∞の可能性Ⅱ人間 b y 空（前書き）

作者「やっと……原作キャラが出せた……それではスタート！」

今回は後書きにアンケートを実施します  
よろしければ参加していただくと嬉しいです

## 第五話：∞の可能性Ⅱ人間 b v 空

「はぁ……凄いなこりゃ」

「えっと……数十年前までは狩りとかしていた地域なんだよね？」

あの模擬戦の後、空の回復魔法により全快し昼食を軽く……とりあえず俺達は人里とゆうよりも高層ビルが立ち並ぶ都市にやってきた

「ほへへ石の槍とかで鹿とかを追いついてた人達がたった数十年でね」

流石に空も驚きの表情を隠せないようだった

「人間って少しずつ知識を覚えその知識で経験し考え難問に立ち向かい成長していくんだけどな……その過程ぶっ飛ばしてこんなに一気に数年でこんなに発展するのは前代未聞かも……」

「凄い……」

「うん…“賢者”…か」

賢者……数十年前に生まれ最初はただの赤ん坊だったが成長するにつれ頭が良くなって数十年も経つと建物を建築することを始めた。更に様々な分野に手を出しその完璧に相応しいほどの頭脳で人々の暮らしは一気に楽になった。

また、結界などを何重にも張り妖怪から人里を守ることに成功した……と近くの妖怪に聞いた話だ（空が脅して吐かせた）

「と……言うことで会いに行ってみよう！」

「今のナレーションからどうゆうように繋いだらそうなるんだ？」

「気にしなさんな」

「はあ……」

俺は疲れたよ肉体的にも精神的にも……

「普通に侵入出来たね」

「俺は苦勞したけど……」

俺達は結界を抜け人里の中を歩いている  
この結界は対妖怪の為、神である空は難なく入れたが俺は妖力があ

るため入ろうとしたらバチバチと弾かれた…空はそれを見ると空間を開き俺が結界の内側に入れるようにした…：やっぱ何でもありだなお前は…：

「ふゝん」

空は物珍しそうに辺りを見渡す…：至るところに家、家、家が立ち並び人里とゆうゆりもはや“街”だな

「そんなに物珍しいのか？」

先程から辺りを見渡すが正直特に変わり無く家だけが建ち並ぶ…：あまり珍しい物は無いが…

「…：見つけた」

「何よ？」

「賢者の家と名前」

「…：一応聞いておくが何をした？」

「俺が疑似空間を作りこの人里を包んでその中から空間認識魔法で一気に街の人の調べたその情報を家にある世界の理にアクセスしてこの街に住む全ての人とその名簿を調べ賢者の家の場所と名前を当てた……因みに賢者の名前は“八意 永琳”」

「お前は……プライバシーと言う言葉を知ってるか？」

「プライバシー……他人に知られたり干渉されたりしたくない私生活。また、その私生活を守る権利……だっけ？」

「お前がやってることは最早プライバシーの侵害だぞ!？」

「……いいじゃん…誰にも気づかれないようにやったんだから」

「そうゆう問題か!？」

「そうゆう問題なんです」

「お前は何様だ!」

「神様ですが……何か？」

「ぐおおおおお……」

駄目だツツコミきれん……

「ほらほら唸ってないで付いたよ」

俺達の前には一回り大きい家……とゆうより屋敷が建っていた

「所でどうやって…呼ぶのか？お互い全くの初対面何だぞ？」

いきなり自分達神です貴方に興味が有る会いに来ました何て……端から見たら頭がヤバイ奴だぞ？

「……確かにそれはヤバイか」

マジで考えていたのかよ！？

「うん」

俺……初めてお前の読心術に感謝したかも……



「それほどでも♪」

……………駄目だこりゃ

「私の家の前で何をしているのかしら？」

「えっ？」

後ろから声がした振り向くと赤と青が半分になっている服を着た銀髪の少女が立っていた

「アンタが“八意 永琳”か？」

「ええそうよ…貴方達は？」

「旅の者だ貴方のウワサを聞いて是非とも会ってみたいと思ってなここに來たわけだ」

あながち間違っていないが何処か黒いぞ空

「そう…立ち話も何ですからどうぞ」

俺達は八意さんの家に招待させてもらったそして客室と思われるところに案内してもらい暫く待つと……八意さんが弓持って矢の先を向けてきた……………えっ？

「えええ……何でs「シュツ」……」

いきなりの事に紅は立ち上がろうとしたが八意の矢が紅の頬を掠めた

「（なっ？何で俺か空何か悪いことした!?!）」

「一つ……聞くわ…貴方達何者？」

「予想的中……はあ…」

「そっ……空？何で俺達敵意剥き出しで睨まれているの？」

「多分八割方お前の所為」

「何で!?!」

「だってお前……八意からしたら妖力隠しているの丸分かりだよ？……そうだな」

「ええ……一体どんな手を使ったかしらね」

「俺……悪役ですか？」

マジかよ……寧ろ悪役は空じゃn「シュッ……」すいません……だからその手にあるデュランダルを離してください（泣）

「八意……すまんこいつはちょっと特別で色々な力が混ざっているんだ……」

「色々な力？……興味深いわね……」

と……まだ警戒心はあるが弓を下ろしてもらった……すまんから空お前もデュランダルを下ろしてください（汗）

「でっ……どうやって結界の中に入ってきたのかしら？」

「俺は空間を操れてなそれで入れた」

「……何のためか聞いてよろしいかしら？」

「友だちだから一緒に来て欲しかった……それだけだ……言っとくが紅は人を襲うことは絶対にしないから……そこは信じてくれ」

空の言葉が届いたのかようやく永琳は警戒を解いた

「ごめんなさいね。誤解して」

「まあ……それが普通な対応なんだろうな……来る前に抑え方ちゃんと教えておけばよかった」

「やっと……誤解が解けた……所で何時になったらデュランダルを離してもらえるんだ？」

「……チッ」

「……………」

俺達本当に友だちだよな？

「とにかくネタバレだが……俺は神でこいつは現人神だ」

「……………えっ？」

あっ…何か吃驚した顔になった…俺はともかく空が神なんて誰も  
思わないだろうしな…更に言えば神とゆう存在ですらあやふやだ  
からな…

「俺達がここに來たのは……………」

それから空は話始めた自分が世界神とゆう全ての世界を統べる神で  
あること何故この世界に來たか何故ここに來たのか……

……………と言うわけだ分かったか？」

「……………」

話が終わると永琳は静かに空に向かい腰を落とした……えっ？

「貴方がそんな存在とは知らず数々の無礼……申し訳ありませんでした」

と、頭を下げた……そっか普通の人間からしても空は人間とは程遠く神々しい存在……

「気なくていい……今まで通りに接してもらおうと有難い」

「……ですが」

「気にするなと言っているんだ……そうだまだ名乗ってなかったね俺の名前は……“夜天 空”……先程説明した世界神の一角、破壊神だ」

「序でに俺は紫乃崎 紅……半人前の現人神だよ」

「先程名乗りましたが八意 ××と言います」

「××？」

可笑い……聞こえるのに××の部分が発音出来ない

「不思議な名で誰も発音出来ないんです」

「八意　ーか……」

「えっ？……空さっき……」

何か聞こえた確かに××では無く名前のような……何かかが

「……さて、そろそろ帰るぞ紅」

「空？……わっ、分かった」

「八意……また来るよ」

「はっ……はい！」

「歪め空間……」

「空！待ってて！」

そして空と紅は歪んだ空間の中に入っていた……

「夜天 空様と紫乃崎 紅様……か」

誰も居ない空間の中で永琳は呟いた



## 第五話：∞の可能性Ⅱ人間 b v 空（後書き）

作者「いきなりですがアンケートを実施します

八意 永琳……もとい八意 ××の××の名前の部分を募集します

……締め切りは9月10日を予定します

よろしければ皆さんどしどし応募していただくと嬉しいです！」

空「無駄だと思うけど……」

紅「可哀想な作者のため応募お願いします！」

## 第六話：闇は一に負は全に 前編（前書き）

作者「ちよつとしたかなり低いシリアスです。書いてたら長くなり  
そうなので前編と後編に分けることにしました

これから東方神々録を宜しくお願いします」

## 第六話：闇は一に負は全に 前編

それは……八意さんと話をして次の日に朝食を食べていた出来事だった

「今日こそ修業するぞ」

「いや……別にいいが……お願いだから模擬戦は勘弁してほしい」

いくら俺が不老不死でも空の模擬戦は本当に死ぬかと思った……いや普通に死ぬ

「大丈夫……模擬戦は……しないよ、けど今日は模擬戦よりもしんどいと思うよ」

「なっ……何やるんだ？」

自分の顔が歪むのがよく分かる……空との模擬戦よりしんどい？俺は予想が出来ない恐怖に震えた

「今日、修業するのは闇の刻印エレボス・カープの制御」

「闇の刻印？」  
エレボス・カープ

聞いたこと無いな

空「ティムとアリスと戦ったのを覚えてる？」

紅「……まあ…覚えてるが？」

空「紅はあの時……吸血鬼化と一緒に“何か”をしたでしょ」

紅「……ああ」

確か……俺の体に刻々の用な物が浮き出て……！！！！

紅がティムとアリス戦のことを思い出した瞬間、全身に寒気が走った……まるで紅の体がその時の“何か”を拒絶しているように

空「思い出した？」

紅「ああ……アレは何なんだ？」

あれは……そうまるで人の……生物の負を自分の体に組み込まれたような……

空「闇の刻印……エレボス・カープ……世界の負を自分の体に吸収することにより莫大な力を得る邪法だよ」

紅「……世界の負を？」

空「ああ……」

紅「まっ……待ってくれ俺はそんな邪法を身につけた覚えは……」

無い……その筈だった

“自分”の記憶の中では

空「夜天 零……の遺したものだよ」

目の前が真っ暗になった……彼奴の？俺を全てを“喰らった”奴の？

オレノスベテヲクラッタヤツノ？

空「そう……それは……言わば夜天　零が……鮮血の殺戮者が遺した  
……最悪最低の呪い……なんだよ」

「……そんな……」

バタンツ！

「紅！」

俺は空の言葉を聞き終わった後、目の前が真っ暗になりそのまま意識を失った

「……ん……ここは」

目が覚めるとそこには……自分の居る場所を含め全てが真っ白で……向こうは真っ黒の空間が広がっていた……それは正に“光と闇”

「一体ここは……何処なんだ？」

「……お前と俺の狭間さ」

「っ……誰だ!？」

俺は直ぐ様、召還魔法の応用でブリユーナクを取り出そうとしたが……

「!？ 出せない!？」

何故か召還魔法は成功しているはずだがブリユーナクが俺の手には現れることは無かった

コツコツ……

真っ黒な空間から何かが此方に近付いてきた……そいつは何故か俺が召還しようとしたブリューナクを持っていた

「お前が何故俺のブリューナクを!？」

「……ククク……さあ？何故でしょうか？」

「ふざけるな！」

「……ふざけるな？ククク……強気だな

「姿を現せ!貴様は誰だ!？」

「……誰だ？」その問いが一番困るんだがな……まあ……いい……  
“オレ”は

その時……俺は……彼奴の顔を捉えた……そいつは俺と顔が瓜二つだった……違うのは髪の色と目の色だけだった

「……お前だ」紫乃崎 紅



闇を連想される用な漆黒の髪……血の用な真っ赤な赤眼……自分とは全てが逆だった

「……始めまして……と言うべきか？ 最も俺のことなぞあの破壊神に聞いていると思うがな

「それじゃあ……まさか……お前が……！」

俺の大切な者を全て喰らい……十六の世界を喰らった空と同じ姓……“夜天”を名乗る……！

「……ご名答……“夜天 零”さ

「きっ……貴様が……」

「……そう……お前の憎くて憎くて憎くて仕方がない鮮血の殺戮者  
夜天 零さ

「鮮血に染まった約束さし勝利の剣……！」  
フラッディ・エクスカリバー

俺は遂に堪忍袋の尾が完璧にぶちギレ夜天 零に切りかかった

―――そうあせるなよ……

パシンッ！

零は紅の斬撃が届く瞬間“片手”だけでいとも簡単に弾いた

「なっ!？」

そんな……! 全力で放ったのを片手で!？

―――何かお前勘違いしてないか？

「何？」

―――あの程度の斬撃なら破壊神も簡単に出来るぞ？

「!？」

―――まさか……お前ずっと手抜きされて戦っていたのを気づかなか

ったのか？

「……………」

「……クハハハ……可哀想な幻影使いだ

「……………」

「……何が自分の意志を貫き通すだ……大して強くない癖に

「違う……違う……！」

「……所詮はお前はそこら辺にいる人間と差ほど変わらん  
あの……八意 永琳と言ったな単純にはお前が勝るかも知れな  
いがお前は絶対に勝つことは出来ない……」

「うるさい！お前は俺の全て喰らった学校の友だちも！近所の叔母  
さんや叔父さんも！そして雪乃も！お前の欲望を満たすために！！  
！！！！」

「……はぁ……」

小さく零は溜め息をしたそれにはまるで呆れたと言わんばかりだった

「……お前……ホントどうしようもない奴だな

「なっ…何だと!？」

「……お前が俺を生み出したんだろう暴食の魔眼と俺を……お前の両親の敵をとるため…力をあれほど欲しがっていたんじゃないか？

「うっ……!」

「……あれほど力を欲しがっていざ力を手にしたら全て俺に任したろう? いや……アレは押し付けたな

「だっ……だから何なんだ!」

「……お前……何時まで自分を正当化するつもりだ

「……………!」

「……今……お前が強気でいられるのも破壊神とゆう存在がいるからだ……彼奴が居なかったら俺がお前の前に現れただけでお前は発狂するだろうな」

「俺……は……」

「……おっと……そろそろ時間だ」

零が急に上を見ると紅がいる真っ白な空間と零がいる真っ黒な空間に罅が入りバラバラと砕けていった

「……もう一度会うことになるかも知れないが言っておこう……原初の罪……始まりの闇は……間違いなくお前だ紫乃崎 紅」

その言葉と同時にお互いの空間が完璧に碎かれ紅はもう一度意識を失った……

「……さて……後は彼奴がどうするかだな……今の奴の体に乗っとるのは手早いが……今度こそ破壊神に本気で殺られかねん……さて……あの幻影使いはどう動くのかな？」



## 第七話：闇は一に負は全に 後編（前書き）

作者「後編になります……またシリーズですがよろしく願いします」

## 第七話：闇は一に負は全に 後編

……何でこんなことになったんだろ？

俺は只……幸せに生きたかった

普通に……何処にでも居る人として生きていたかった

けど……あの時の幸せは只の他人の欲望の所為で粉々に砕かれた

けど……奇跡的に妹は生きていた……いや生きてくれてた

俺は生きてくれた妹に為にまた幸せを掴もうとした

けど……何処で間違ってしまったんだろう？

いつの間にか……自分は……何よりも憎悪抱いた……

俺の幸せを砕いた奴が無罪で釈放されたのだ



俺は怒った……そして何よりこんな理不尽な世界を恨んだ

そして……俺は願った

“力”を寄越せよ……と

彼奴を……八つ裂きに出来る力を……世界を変える力を……

だが……それは間違いだったのに気づかず俺は遂に力を入れた  
……

身勝手な俺の力が手に入ってしまった力は……全テヲ喰ラウ力ト最  
凶ノ魂……もう一人の“自分”だった

「……知らない天井…じゃ…ないか」

ここは確か……空が用意してくれた自分の部屋……だったけ？

「……何をしたかったんだろうな俺……」

自分の意志を貫き通す……何も出来てないそもそもそれが本当の自分の意志かすら分らない……彼奴……夜天 零が言っていたのは全て正論で……間違っていたのは全て……俺自身だ

徐に虚空に手を伸ばしてみる……そして…

「武装召喚……天終」

パシンッ！

手には適度な重さが伝わる……そこには夜天 零が愛用していた双剣《天終》が握られていた

エレボス・カープ  
「闇の刻印……そうゆうことか」

空の言った通り……これは呪い……“夜天 零”もう一人の自分が殺された場合……と俺とゆう元々の存在“紫乃崎 紅”を媒体に再度復活するための術式……その証拠に……

「右目が赤色になってるし髪も少し黒っぽくなっている」

天終を鏡代わりに自分の顔を見てみると……両目が蒼色だったのが左目があ……血を連想される用な赤色になっていた  
髪も白銀に黒が入り少し黒っぽい銀色になっていた

「……………」

分かる……自分はこのままでは“無くなる”

それを防ぐために空は闇の刻印エレボス・カープを制御することでそれを阻止しよう  
としたんだろう……

「そうだろ?……………空」

「……………」

扉が開く……そして入ってきたのは少し落ちごみな空だった  
……夜天 零に近づいているせいか……身体能力や気配を感じる勘が  
数倍に上がっている……もう自分の体かどうか分からないな

「紅……」

心配そうな顔で此方を見る空……

「俺……どのくらい寝ていた？」

「一週間……」

……それは、心配かけてしまったな……

「空……俺はもう見ての通り“夜天 零”に近づきつつある……もし俺がまた……鮮血の殺戮者“夜天 零”になった場合はどうする？」

「……………」

空はその言葉と共にうつむいてしまった……ふう……空？俺の心の声……聞こえる？

「……コクン」

肯定とばかりに空は頷いた

もし……俺がもう一度“夜天 零”になってしまったら……どうするんだ？

「……………」

カチ……

空は何も言わなかったが自分の腰に差している終夜に触れた……倒すか……

「……ごめんな」

そう……眩くことしか出来なかった……けど俺は……もう……お前の手を借りるわけにはいけないんだ

「えっ？」

此方の思考を読んだ空が声を上げた

「彼奴と話して分かったんだ……俺は只逃げていたと逃げて逃げて逃げて自分の罪から逃げて何もかもを空に押し付けたんだ」

「……………」

これは自分の意思でもエゴでも無い……これは自分の意地……けど……だからって……俺は彼奴に向き合うとかは出来ない……けど……もう空には迷惑掛けられないから……

「どうする……つもり？」

そこで……空は下げていた頭を上げた全て“光”を連想されそうな破壊神なんて誰もが思いそうにない金髪銀眼を持つ……親友の“夜天 空”

「どうしようかな……」

「紅……」

「なに？」

「闇の刻印をどうするの？」  
エレボス・カーフ

「……制御……それは無理だと思う……ねえ？世界神としての“夜天空”ならどうする？」

「!？」

世界神として……世界神は全ての神と全ての世界を統べる義務がある……空からすれば俺は……間違いなく世界の敵……だろうな……何だって……十六の世界を俺は喰らったんだ

「世界神……としてはもう一度……“紫乃崎 紅”がもし“夜天 零”となるようだったら……両方の存在を完全に……破壊……しないといけない」

拳から血を流しながら……空はポツポツと呟き始めた  
悔しいんだ……もしまた俺が鮮血の殺戮者になるようなら俺と夜天零……両方を完全破壊……しないといけない……

それを防ぐために空は俺に闇の刻印の制御を提案したんだろうな

「空……ごめんな」

俺は優しく空の頭を撫でた……それと同時に空から何かが切れたように涙を流し始めた

「何でだろう……何で闇の刻印を破壊できないんだよう……」

……闇の刻印は破壊できない何故なら俺と彼奴は精神がリンクし俺とゆうバランスを保っているからだ……もし破壊すればそのバランスは崩れ俺は……死ぬだろうな。それと同時に夜天 零も死ぬだろうと思うが……

「……空……最後の願い？聞いてもらっていい？」

「……グスッ………グスッ」

嗚咽しながらも空は何度も頷いた

「俺を……夜天 零と共に封印してほしい」

「!?!」



「もし……一億分の一の確率でも……俺が夜天 零と共に歩く道を選んだなら……お前はなにもしないですむだろ」

「!?!?……無理だよ……そんなこと不可能だよ!?!」

自分でも……ぶっくりしているよ……まさか自分の家族や友だち……ましては世界を喰らった奴と共に歩くなんて……ありえないだろうな

「大丈夫だよ! 紅! 俺が何とかするから紅は闇の刻印の制御すれば……」

「……間に合うとでも?」

「っ!?!?!」

「さっき……俺は言ったよ……俺はもうこれ以上……お前を頼るわけには……いけないんだ」

「……………」

「分かってくれる？」

「……分からないよ……分かりたくないよ！！！！」

空が叫んだ……泣きながら友を無くすことなるかも知れない……封印なんてなおさら危険がある  
封印することで……彼奴がそれを反対し無理矢理俺の体に乗っ取られる可能性もある……

「100億年以上生きてくせに……もうちょっと物わかりよくなりなよ……」

「どうでもいいよ……！！」

俺は今まで頑張った世界神として！夜天 空として！友を助けるため！頑張った！

……なのに……なのに！！」

「ごめん」

この一言……今の俺はこんなことをゆう資格なんて無い……けど……  
……ここで謝らないといつ謝るんだ？

「……三日！」

「えっ？」

「三日で準備する……けどその封印は半永久的な物……けど巨大な力にはまず耐えきれない……」

「……………」

「けど……親友として信じて俺は紅を封印するから……だからだから……何千年……何万年……何億年……掛かってもいいから……絶対帰ってきて……………」

「ああ……約束するよ」

「……………っ！」

バタンツ！

空は紅の答えを聞くと直ぐに部屋から飛び出した……  
……悪いことなのは百も承知だ……けど……それでも……彼奴はそんな俺を信じてくれた……もうやるしかないか……自分の“闇”であ

り“負”でもある……自分自身の戦いを……

動くことを止めた歯車はいつの間にか外れまた新たな歯車を探すため常闇の中に消えていった……

探す歯車は悪魔の歯車はそれは沢山の歯車を巻き込み動いている。

外れた歯車はその悪魔の歯車に飲み込まれるか……それとも逆に飲み込むか……それは誰にも分からない。

第七話 闇は一に負は全に

## 後編 (後書き)

作者「シリウスが一応終わり……ほっと一息したところで……今日のゲストはこれぞ男気! 《轟覇龍皇》アカムトルマのティムさんに来ていただきました!」

ティム「おい！作者！男気って何だ！俺は列記とした“女”だ！」

作者「あれ？そうだっけ？」

タイム「……………」怒

作者「アハハハ（汗）冗談冗談！ジョークだよジョーク！」

タイム「……一変……」

作者「ちよつと（汗）」

「タイム死んどけやー！ー！ー！ー！ー！ー！」

作者「ぎゃあああああああああああああああああああ……」

.....」

ピーンポーンパーンポーン

只今、大変グロテスクな映像が流れているため暫くお待ちください  
.....

ティム「ふん！」

作者「あゝ通算100回以上江戸っ子気質な死神の船に乗りかけた……」

ティム「もう乗って山田さんに無限地獄に突き落とされればよかったのに……ちっ！」

作者「かなりに酷いな！」

俺の綺麗で繊細なガラスのハートに罅が入ったよ!？」

ティム「序でに砕けろヘボ作者！」

それに自分で綺麗で繊細だなんてナルシストか teme だ……」

作者「なに!?! いきなり何なの!?! 何が好きでこんなに毒舌連発されないといけないの!?!」

ティム「teme が俺と空をイチャイチャさせねえからだ!」

作者「何たる理不尽&自分勝手!?!」

ティム「このダメな作品を見てくれてありがとうが  
感想なども送ってくれると嬉しいぜ」

作者「作者無視して勝手に宣伝されちゃったよ!」

ティム「じゃあな！俺はこれから空と紅茶タイムが待っているんだな！」

作者「最後は投げ出された！？」

もうどうでもよくなってきた……とりあえず……次回もお楽しみに！」



## 第八話：空は時に明るく時に暗い（前書き）

作者「やっと出来ましたがか・な・り短いですが！  
けど頑張って生きたいな〜と思います」

## 第八話：空は時に明るく時に暗い

……遂に決めた

自分の本来の道を探しに

……俺は………

「ふう………」

紅は空との話が終わった後……急いで空の屋敷から出た………理由は大抵と天空……ティムさんとアリアさんから逃げるためだ……前とは違い……本当に泣かしちゃったから……逃げないと生命の危険があるからだ

「さて………」

自分で言うのもなんだがかなり遠くに逃げた……だから俺は封印まで今日を入れて三日……色々な所に行こうと思う……

………逃げるんじゃないよ？

俺がもし復活したとき場所がここがどこか分からないんじゃない？困るだろう？

……けど…他の人から聞いたら只の言い訳か……

「八意さんにも会いにいつてみようかな……？」

………その為にはまず妖力を抑えることが出来るようにならないと……あの結界の中に入れない

「でも……どうやってやるんだろう？」

妖力は空も使えない力……それに俺はそれ以外に霊力、神力、魔力を持っている

それらもまだ完璧に抑えられている訳じゃない……言わば今の俺は力だけは馬鹿げにあるがそれらを一切使いこなせない……と言った感じか……

「恐らくけど……俺は夜天　零と戦うことになる」

確信はある……何故なら彼奴は何よりもどんな生物よりも何か殺したがる

……今思えば俺もバカだなあっちは最凶……俺は最弱では無いが普通くらいの実力……そんな絶対的な力の差があるにも関わらず俺はそいつと共存の道を辿ろうとしている……その俺が決めた道ですら分からないまま

「…ホントどうしようにもない……バカだ」

自分でも分かる……自分の友だちや妹を殺した奴との共存……それがどんな意味をするのか

「けど……俺は……」

決して許す訳じゃない……ただただ……己の罪……闇と向き合うことにしただけだ……

「今から修行しても奴には勝てないか……」

恐らくだが……俺は夜天 零と戦うことになる……彼奴はまだ殺したり無い……いや……彼奴の殺戮は全ての生物を殺すまで続く……

「けど……」

それを生み出したのは……間違いなく自分自身……己の欲望により作られてしまった……存在

故に……自分より遥かに強い……間違いなく今の自分がまともに戦っても簡単に遊ばれるだろう

「彼奴に対抗できるのは……やっぱりあれしかないか……」

今までまだ一度も使っていない……武器……ブリューナクでもブラッディ・エクスカリバーでも無い“手加減”が出来ない相手を殺すための武器……

「血を求める魔剣……」  
ダーインスレイヴ

その一閃は過たず……そして……決して癒えぬ傷を残す……それだけではないこの剣は相手の生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらない……言わば相手を殺すための武器

「…………ハア……」

正直“使いたく”は無い

これは自分にはデメリットは無いしかしこれはほぼ確実に相手の生命を脅かす剣だ……

「……………」

そんな思考を続けていれば既に夕暮れ……帰らないとな……空が心配する

「家……か」

帰る場所……それでいいのか？

自分だけが勝手に帰る場所と決めつけているんじゃないのか？  
そんな考え方が頭の中を過る

「……………！」

徐に空を見ていると突然後ろに気配を感じた……それは……

「遅いので……ご迎え参りました紅様」

空の三人の使い魔の中でも一番強いだろう………《邪神》イクスが立っていた

「イクス……さんか」

「はい」

……怒っているなイクスさんも声に何処か怒りを感じる……

「どうしましたか？」

「いや……何でもないよ。ご迎えありがとう」

「いえ……」

……もう……難しいことは辞めよう

勝てないは勝てないけど負ける気も更々無い

……俺は俺だ只一つの紫乃崎 紅だ……それ以上でもそれ以外でもない……！

空と……約束したんだ絶対に帰るともう一度再会すると……

まってる……！

夜天 零…俺はお前に絶対に勝って見せる！

夕暮れの時の中で一人の少年は決意する出口さえあるのか分からない  
荆の道を……

ーーククク……そうかそうゆうことか……まあ楽しみにさせても  
らおう……殺戮をな……



## 第八話：空は時に明るく時に暗い（後書き）

作者「またシリアス風に出来てしまいましたが！とりあえず今回のゲストは空の使い魔の中で最強である《邪神》イクスさんで……す」

イクス「空様の執事を勤めさせてもらっているイクスです。いざお見知りよ……」

作者「早速ですが質問です！

イクスさんの部下でもあるティムさんとアリアさん……どう思いですか？」

イクス「そうですね……よく喧嘩はしますし手も係りますし……大変です」

作者「あ……あのお二人さんはよく喧嘩をしますからな……それでよく止める役として……」

「はい……」

作者「所でどうやっていつも止めるんですか？」

イクス「そうですね……色々ありますが基本的には二人の頭に拳を叩き込み沈黙化させます」

作者「いっ……痛そう」

イクス「何時も下らない喧嘩をするのが悪いのです」

作者「ハハ……」

イクス「さて……次回は」

作者「はいはい……遂に光と闇の対決です！お楽しみにしていただくと凄く嬉しいです！それでは！……」

## 第九話：白と黒の境界の中で……前編（前書き）

作者「遂にぶつかる紅と零……光と闇の対決に勝利の女神はどちらに微笑むのか……『第九話：白と黒の境界の中で……前編』！どうぞ！！」

## 第九話：白と黒の境界の中で……前編

「術式……完成と……」

とある……洞窟の前で一人の少年が何か複雑な術式を完成させた  
……その術式の名は『天拒地絶封印結界』……天地すら拒絶する程の  
封印する結界だ……しかし恐らく紅の最大の力であれば直ぐに破れる  
程度……

「……後は紅を連れてこれば……この結界は完成する」

その人物は……紫乃崎 紅の親友である“夜天 空”……三日前に  
頼まれた封印結界を構築し終わった所だ

「さて……帰るか」

その背中……何処か悲しそうだった



「……………」

神住亭……空が名付けた屋敷で俺達の家でもあるけど……俺は今日…俺は“当分”居なくなる

……戻ってこれなくなるかもしれないけどな……

「ぐだぐだ、言っても仕方がないか…」

コンコン……

「空……か？」

「うん……」

扉の内には空の何時より元気の無い声が聞こえた……

「準備が出来たのか……？」

「ん……紅は？」

「元から用意するものなんてないよ」

「そう……」

俺は立ち上がり扉を開けた……そこには真っ白いコートで身を隠した空が立っていた

「付いてきて……」

「ああ……」

空は何処かに飛んでいった俺もそれを見失いように追いかけていった

「付いたよ……」

「ここか……」

空達の目の前にはどこにでもありそうな洞窟があった  
しかしその周囲には変わった文字が書かれたお札が幾つも貼られて  
いた

「俺はどうすればいい？」

「この洞窟の奥にあるお札の貼った石に手を合わせば結界が発動す  
る」

「永琳にお別れよろしく……」

「死ぬ気なら言わない……」

実はあれからもう一度永琳に会ったのだ……何故か分からんが普通に結界の中に入れたのだ……それから永琳に会いに行つて雑談をしたのだ永琳は不老不死の薬……を作りたいらしく俺に血を下さいと頼んできた

断る理由も無かったから提供したがな……

更に永琳の本当の名前は八意 天智と言うらしい……何故空がそれを知っているのか教えてくれなかったけどな……

「……分かったよ……生きれるように頑張るよ」

「そう……なら伝えておくよ」

「……………じゃあな」

「うん……帰ってこないと……破壊、破滅、消滅、抹消するから！」

「……はは、分かったよそうならないように頑張るよ」

そして……俺は……ゆつくり洞窟の中に入っていた

「あれか……」



暫く歩くとそこら辺の石より一回り大きい石がありその中央にお札が貼れていた

「それじゃあ……会いに行ってみようか……」

己の闇に」

それと同時に紅は石の中央に貼られていたお札に手を合わせた……すると……

バチバチバチバチ！！！！！！

洞窟の中に紫電が走り徐々に紅の体は機能を失っていった

「……………ハア…やっぱり最後はもう一度…」

その言葉を言い終わる前に紅の意識は無くなった



――よう……三日ぶりだな

「!?!」

その言葉と同時に紅は目覚めた

……目の前には自分を見下ろしている夜天 零の姿があつた

「夜天……零」

「――まさか、こんなに早く再会するとはな……これも破壊神の導きか？」

「違う……これは俺が望んだことだ」

そう……これは自分の意地……己の意思で決めたことだ

「――へへえ……でっ何でこんな道を選んだんだ？」

「さあな？……お前には理解できないと思うぞ」

「――はっ……！……そうかい」

「それより俺はお前に用がある」

「――……俺に用？何だ？今日は何故か気分がいい……聞いてやるぞ？」

「……俺とお前……お互いの存在は絶対に異なる存在なのか？」

「……そうだな……絶対に異なる存在じゃねえな……確かに魂は別物だが俺とお前は精神がリンクしている……まあ……異なる存在だが別物じゃないのは事実だな」

「そうか……」

「……そんなことのために自ら封印することを選んだのか？」

「……精神がリンクしているからって俺の思考が読める訳じゃないか……」

「……ああ……俺達がリンクしているのは体と精神の痛み、悲しみ、怒り……言い含めば負の感情だな」

「なら……俺がここに來た理由は……」

「お前を手懐ける為だ」

「……俺を手懐ける……だど？  
ククク……アハハハ！！！」

笑える話だ！お前の全てを奪った奴を殺すのではなく手懐ける……傑作だな！

「本気だ……お前を手懐けることが出来れば俺の更なる力を手に入れる」

――渴望だな！紫乃崎 紅！

「ああ……しかしその何処に間違いがある？  
世界は所詮全て力だ

力が無ければ全ては無い  
守りたい者も  
殺したり者も  
結局は力がなければ全て“無”だ！」

――お前がそんな考えたをしていたとはな……

「だから俺はお前を制する！  
更なる高みを……力を手に入れるため！  
槍を！剣を！  
貫き！斬る！

それ以外に俺の道は無い！  
俺の道はもうそれしか……前も後も道は無い！！！！」

――成る程……俺が騎馬となりお前が俺に乗る王……と言うわけか

「ああ……！」

来い！……轟く五星！  
ブリューナク

パシンッ！

紅の手には黄金に輝く五つの穂がある神槍が姿を現した

『残念……だ』

「!？」

その言葉と同時に虚ろ的だった零の体は実体化し凄まじい殺気を放つ奴へと変わった

『黙って聞いていれば……お前……自分が俺に勝るとでも？』

「ああ……」

ブシャー――！！！！

「えっ？」

分からない……零が消えたと同時に自分の右肩から左腰まで一気に斬られた……その姿……いや指一本も反応出来なかった

自分の右肩から左腰まで吹き出す血……紅はそれを見ているしか出来なかった

『いいことを……教えてやろう……お前と破壊神が戦ったとき……破壊神は本来の力の一割程度しか出してなかったぞ？……因みに俺が出した力は三割位だ』

……俺はその程度なのか？  
偉そうな口をあんなに叩いて……

ゆっくりと……紅は倒れていくその目には先程の生氣は感じられなかった

しかし……

「ぐっ……！」

何とかブリューナクを杖代わりにして自分が倒れることを防いだ

『ふっ……紫乃崎 紅……確かにお前が言ったのは正しい……けどなお前の場合は全て言ってるのは“嘘”だお前は本心であんなに言っているんじゃない……』

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

『後…：…そうだないことを言ってやろうお前に足りねえのは…：…  
“本能”だ…！！！』

「!？」

『お前には本能がねえ！

力を持つ者がより大きな力を発するために必要なもの…：…  
ただひたすらに戦いを求め！力を求め！

敵を容赦無く

叩き潰し！

引き千切り！！

斬り刻む…！！！

力に対する絶対的な渴望だ！

俺達の皮を剥ぎ！肉を抉り！骨を砕いた神経のその奥…：…原初の  
階層に刻まれた研ぎ澄まされた殺戮反応だ…！！！！』

零は言う…：…渴望…：…欲望が真になれば力は手に入れないと

『お前にはそれが無い！

剥き出しの本能ってやつがな…！！

お前は理性で戦い理性で敵を倒し理性で力を得ようとしている…！！  
槍や剣の先に鞘つけたまま誰を貫き斬るつもりだ…？



だからお前は俺より弱いんだよ……紫乃崎 紅！！！』  
零が持つ刀……血終冥闇死は投擲し刀は……紅の腹に突き刺さった

『俺はゴメンだ

破壊神の奴はお前の力をどうだか知らないが

俺は自分より弱えエ奴の……騎馬に……従うつもりは無い

……普通ならこのままお前の体に乗っ取ってまた暴れたいが残念な  
がらもう……暴食の魔眼も存在丸ごと破壊されてねえしな俺がお前  
を乗っ取ったとしても破壊神が俺を再度殺しに来るだろうしな……』

朧気になる

紅の意識……その目は何処にも向かずただ目を開いていた

『……お前みたいな弱い奴に従うなら……俺はここで封印されてる  
ぜ……一生な』

## 第十話：白と黒の境界の中で……後編（前書き）

作者「遂に決着！勝つのは紅か！零か！  
これで決まりだ！……！」

※これ以上に無い駄文が予想されます……ご注意を

## 第十話：白と黒の境界の中で……後編

『所詮分かってとしたとしても俺には勝てねえよ……お前は』

……腹に刀を突き刺さったまま紅はピクリとも動かない……死んでいるようだった

『もう意識はぶっ飛んだか？

ハア……弱いな……もう少し粘ってくれと期待していたんだがな……』

一応あれでも元“オレ”だからもう少し楽しませてくれると期待していたんだがな……

……ま……だ……

『……ああ？』

……まだ……だ……

空気が……変わった

『……ククク：そうだよな？一応でもオレだよな……まだまだ楽しませてくれるんだよな？』

それはまるで嵐が来る前の静寂……ただ寒気がするほどの静寂さが辺りを纏った

……そうだよな……

『ああ？』

……俺は空と約束したんだ……

……絶対再会しようって……

……彼奴は俺を信じてくれた……

……俺の罪を許してくれた……

……けど……

……俺には何も空に恩返し出来るほどの……

……力も……

……力も……

力も……

も……

……

………永琳にも何も言わずさよならもう二度と会えないなんて………

……認めるられるか………



「……空との約束を思い出したただけだ……」

『よっぽど、破壊神と仲良くやっているんだな』

「ああ……夜天 零…俺はこれから……全力でいく……空に会うために……永琳やイクスさん達に会うためにも……お前を俺は……倒す！」

『来るならこい！……その仲間や友からへの想いの力…見せてみろ！！！！』

「……来い！……鮮血に染まった約束されし勝利の剣！……血を求め  
ダイインフレイヴ  
る魔剣！」  
ブラッディ・エクスカリバー

パシン……！！

紅の手には鮮血に染まった赤黒い聖剣と全てが真っ黒な漆黒に染まった吸血の魔剣が現れた

『紫乃崎 紅……最後に見せてやろう……これは最凶の不存在……これが完成したのは破壊神に殺られた後だがな……武装召喚……』

最強不存在

【異狂百足】

[illegible]

「!？」

それは死者の叫び……地獄から……深淵から……どんな光さえも届かない飲み込んでしまう漆黒の黒……世界の負が……世界の闇が……零の手に集まり……一つの武器となった……

「鎌  
・  
・  
・  
・  
・  
」



『……これは正に全てが一撃必殺…当たるなよ？  
当たれば確実に死ぬぞ？』

「……………」

ゆっくりと紅は構えた……零が持つ何十の小さい目……所々が血の  
ような赤で、闇のような黒で……その存在ですら……そこに存在して  
いるですら分らない……正にそれは不存在…何処にでも存在して  
も何処にでも存在しない……何もかもが当てはまらない……鎌……  
紅の目にはそれだけにしか目には入らなかった

『……今度は6割出してやる……一撃で死ぬなよ？』

シュ……

ガキン……！！

「つつ……！！」

ギリギリ……紅の首元で鎌はその動きを止めた…何故ならブラッデ  
イ・エクスカリバーとダーインフレイヴをクロスさせ防いだからだ

『一撃じゃ……決まらなかったか…』

「空気を切る音で判断した……ギリギリだったけどな」

『けどな……これを防ぐのは間違いだ』

ギリギリギリ……

「なっ!？」

零の鎌……天壤喰影の刃は少しずつ少しずつ……ブラッディエクスカリバーに食い込んでいった……

『こいつは……暴食の魔眼の力に喰われた十六の世界の負の集合体……本来は宝具等や神等を喰らうために作ったんだがな……完成直前に破壊神に殺られて……喰らう力が退化して全てを切り裂く力になってしまったけどな……それでもこの世でこいつに切り裂けない物は……存在しねえ!!!!』

バキンッ!

「うっ!？」

更に力を込められた零の一撃に遂に……ブラッディエクスカリバーは………切り裂かれた

『よそ見は死を招くぜ…月鋭斬鎌！』

魔力を纏わせ更にその力を増した一撃が紅を襲う

「ぐっ……ブリューナク！」

バキンッツツ！！！！

その一撃を紅はブリューナクを出し防ぐが直ぐにまた切り裂かれてしまった

『言っただろう？防ぐのは……間違いだ』

「……そんな…」

空から……空から譲ってくれた……武器が……ぐっ……

『さあ……どうする？』

お前の武器は後……そのダーインフレイヴとかだけだろ？』

「……………」

ヤバイ……俺の武器は夜天 零の言う通りダーインフレイヴ……しか残ってない……後は……………」

ふと……紅の目に入っただのは自分の手……………」

やるか……このやり方だとダーインフレイヴはブリューナクやブラッディエクスカリバーと同じ……切り裂かれてしまう……

……空に謝るか……

『作戦会議は終わりか？……ならそろそろ終焉だ！』

零は構えた……その姿は正にこの世の全てを刈り尽くす……“死神

”……

『これでサヨナラだ！』

殺神烈鎌牙！！！！』



『!?!?』

その羽は意志があるように一瞬だけ零の目視を隠した

ザクッ!!

それと同時に零の体に何かが貫通した……

『ちっ……あの羽で目視を隠し一瞬判断を遅らせやがったか……』

「いい……賭けだったよ」

零の体を貫いたのは……紅の手だった

紅はダーインフレイヴが切り裂かれた直後、吸血鬼化し自ら羽を切り裂かれることで一瞬零の目視を隠しその隙に吸血鬼化により爪の伸びた手を零の体に突き刺さした……それが紅が考えた賭だった

『けどな……俺には……!?!?』

直ぐ様零は天譲喰影を紅目掛けて降り下ろそうとしたが……

『俺の……右手が天譲喰影が無い!?!』

いつの間にか零が持っていた天譲喰影は右手ごと無かった

「……知ってるか？」

『なに!?!』

紅の手にはいつの間にか一番最初に切り裂かれた鮮血に染まった約束されし勝利の剣が握られていた  
ブラッディエクスカリバー

「吸血鬼の時の俺は……幻影を具現化出来るんだよ!!!!!!」

そうあの一撃の時に……紅は吸血鬼化した直後にダーインフレイヴを具現化し右手に向かって投げたのだった

『それが……何だ……右手が無くなっていれば……誰だって……』

普通は痛みで気づく……しかし

「忘れたか俺の能力は幻影を司る……少し位なら痛みを幻にして誤魔化す位は出来るんだよ！」

『ぐっ！』

紅は今ある神力・靈力・妖力を全てブラッディエクスカリバーに集中していった

「なっ!？」

「確かに力や速さの差は合っても……こんな至近距離でよけるかな！？」

「真名解放……」

『この至近距離……お前も巻き込むぞ!』

「そんなこと……知るか！！！！！！」

鮮血に染まった約束されし勝利の剣!!!!!!!!!!!!!!  
ブラッディエクスカリバー

\_\_\_\_\_!

ドガガガガアアアアンンンン！！！！！！！！！

！！！！！！！！



極限にまで集中された闇の極光は紅と零を呑み込んだ

『ぐっ……』

零は闇の極光に呑み込まれながら体をボロボロにしながら何とか耐えた……

『まさか……あんなことをな……俺も腕が堕ちたか？』

辺りを見渡すが……紅の姿は無かった

『何処だ？俺が立てれるなら……彼奴は』

……悠久の中に刻む漆黒の常闇……







## 第十話：白と黒の境界の中で……後編（後書き）

作者「やっと終わったところで今日のゲストさんは前々作の主人公……鮮血の殺戮者“夜天 零”さんです！」

零「何で俺がこんなものに出なきゃいけないんだ？」

作者「まあまあ……正直言いますともう出番は無いに等しいかもしれないので……」

零「それにしてももうすぐで本格的に東方に入っていくんだな？」

作者「そうですね〜後一話何か適当にした後東方世界に入りたいですね……はい」

零「お前えらく敬語だな」

作者「……前々作の前書きと後書きを読んただけに分かると思っています……ガタガタガタ」↑トラウマ

零「まあいい……次回お楽しみに」

作者「感想を送っていただくと凄く嬉しいです……ガタガタ」

**第十一話：紫乃崎 紅と夜天 零（前書き）**

作者「久しぶりの投稿です……短いですがどうぞ！」

## 第十一話…紫乃崎 紅と夜天 零

「倒し……た……か？」

自分に残ってあった全ての魔力を使い使った俺の最大にして最終の魔法……『エクセキューション・デイドエンド・ゼロ』が……何とか決まったが……相手は十六もの世界を喰らった鮮血の殺戮者……夜天 零だ……

詳しくは知らないが空の最後の切り札を出したほどの相手……何が起きても不思議じゃない

「……………っ！」

突然身体中に激痛が走った

……そっか俺は現人神で体の殆どが神なのに無理して吸血鬼の血を蘇し自分の体の構造を無理矢理変化させた……その反動か……！？

「ゲホッ……ゲホッ！」

口から赤い液体が吐き出る  
それが血であることに気付いた時は……俺は自分の意識を手放していた





『ちっ……』

目が覚めると“アイツ”側の白い空間だった

『……負けたか』

最後の技……エクセキューション……何とか言ったか  
……正直驚いた、アイツにあんな魔法が使えることは知らなかった

『結局……全力を出す前に終わってしまったか……』

以外に頭が廻るな……アイツ……6割……結局本気を出すことは無かった……破壊神に負け今度はアイツに……負けたか……

『……アイツは?』

ゆっくりと首を動かし辺りを見渡すとアイツが居た……何故か口から血を吐いていたがな

『後先は……考えないみたいだな』

やれやれと……零は立ち上がった  
紅にやられた全ての傷は既にもう再生していた

『風夜の風 纏わし この者に 暫しの癒しを……ナイトヒール』

紅の近くに零は近付くと零自身、絶対使わない回復魔法で紅の体を癒した……

「ん……」

元からの回復力もあり直ぐに紅は目覚めた

『起きたか?』

「……………俺は……………」

『……………ああ…認めてやる…お前の勝ちだ』

「……………ありがとう」

はっ?……………何でありがとう何なんだ?

俺は敗者だ……………敗者は勝者に従うか殺されるのが道理だ

「結局……………お前は6割しか出さなかっただろ?

ブラッディエクスカリバーも最後の魔法も全力を出せば避けれたろ  
?」

『……………ちっ』

こいつ……………まあ、分かって当然か俺が言っていたんだよな

『知らねえな……兎に角……俺は負けた敗者だ、お前は勝った勝者だ……よってお前が王で俺はお前を背中に乗せ走り回る騎馬だ』

想いの力……見くびっていた

俺はこいつと入れ替わった時から殺戮を繰り返した。目に入る全ての人間を動物を神を喰らってきた。

それ故俺は何時も孤独だった。

別に寂しいとかとか苦しいとかそんな感情は俺には存在しなかった俺にとっては……

殺戮が自分の欲を満たし

血が自分の喉を潤し

殺し合いが……相手を潰し抉り切り裂き……それが自分だ……

“そうゆう形” だったんだ

勿論、味方？ 仲間？ 友達？……そんなこと等、全く理解出来ず……只……全てを喰らい殺すのが俺の存在主義……俺が俺…… “夜天 零” とゆう存在だった

『でっ……覚悟はいいか？』

「……はい？」

『てめえと俺が一つになるのは理論上……不可能だ…』

「!…何でだ!?!」

分かってねえな……こいつ

『俺達是一个の体に二つの魂が入っている一つは俺でもう一つはお前……それは理解できるか?』

「ああ……」

『俺達同士の魂は一部リンクしているものの俺達自身全く異なる存在だ……よって異なる同士が引付くと……どうなる?』

「反発する……」

『そうだ要は俺達は磁石だ』

「って……ことは?」

『一つになろうとするほど俺達は傷つく』

「……………」

それからこいつは顎に手を当て何か考え始めた……何をやろうが無駄だな……

俺達を関係を光と闇で表せばこいつは限りなく光で闇でもある。俺はその逆で限りなく闇で光でもある……矛盾した存在だ

「……………」

『どうだ？…無理だろ？』

「俺達の負の感情の一部はリンクしているんだろ？」

『……そうだが？』

こいつの考え方が分からん同じ存在だが違う存在でもあるからな考え方かた思考が全く違うからな……

「そのリンクを広げられいか？」

『……はあ？』

「俺とお前が負の感情を一部リンクしているならそのリンクを広げ俺達の精神を接続するんだよ』

『…………それは確かに可能だ』

「そうか……」

……こいつ確かにお前にしてはいい考え方だが……

『紫乃崎 紅』

「ん？」

『確かにお前の案は可能だ……しかしそれをした場合お前は負の感情だけでは正の感情まで俺と繋がるぞ？……これがどんな意味か分かるか？』

「……………？」

本当にこいつ……頭がいいのか全く分からない……天然か？

『正の感情……喜びや楽しいといった所か……俺がそれらを感じる時はどんなときか分かるか？』

「……まさか」

やっと分かったか……そう俺が正の感情……喜びや楽しさを感じるのは……一つしかない

『人を……生き物を殺すことだ』

「っ……！」

『分かるだろう？。俺と繋がると死を……殺し合いを極限にまで求めることになるぞ』

そう……それが俺の本質……底なしの殺戮を繰り返し求める本能……



『俺と不完全ながらも繋がった場合……少なくともお前とゆう存在……紫乃崎 紅ではいられないぞ?』

**第十二話：零崎 紅夜と紅天 紫零（前書き）**

作者「やっと……出来ました……どうぞ…（眠）」

## 第十二話..零崎 紅夜と紅天 紫零

余りにも残酷な真実……何故……何故？  
世界は……俺は……

歪ンデシマツタンダロウカ？

「俺は……雪乃を……あの頃に戻るのか」

もう……紅の目には完全に光……希望が失われ……絶望に染まった

『あの時よりは多少マシだ。まあ……根本的な所は何も変わらない

がな』

「……………」

力を求めすぎた結果……起きてしまったあの惨劇

人を殺し

動物を殺し

自然を殺し

神を殺し

……全てを殺した

あの時の自分……

『あの時は凄かったなぜ世界に絶望、悲鳴、混沌に呑み込まれながら殺し喰らったお前の……本性』

あれが……俺の本性……

『どんな人間にも闇は存在するどんな闇を持ち生まれるのは誰も分らない……その中でお前は最凶の闇を持って生まれた』

闇……光がささなくて真っ暗で……何も見えない……もう何も

『ククク……俺が言うのも何だがそのままだと何のためにここに来て俺と戦ったて勝った意味すらねえぞ』

……ピクッ

絶望に染まった瞳が少し動いた

『てめえに本能が足りねえとも言ったがもう一つ足りないものがある……覚悟って奴だ』

覚悟……？

『善も悪も強さも弱さも全てありのまま受け入れる心……決心つてやつだ』

お前は俺と言う呪縛に解き放たれたとき何か一つでも自ら考え行動に移したか？』

「……………」

無い……俺はこいつからの呪縛に解き放たれたときからずっと空に助けを求め俺は何もしなかった。

今回のこともこいつと会わなければ俺は只こいつに怯えるだけで全部空任せになっていただろう

「そうだな……自分の意思で歩きかなきゃ……俺は何時までたっても……弱いままだ」

紅の目にはいつの間にか生氣が宿っていた

「俺は……もう目をそらさない……俺はお前と向き合う！」

『……はぁ……分かったその前にこれだけは言っておく……俺にも言えることだが……俺達二人の存在……“紫乃崎 紅”と“夜天 零”は消滅するがいいか？』

全く異なる存在が不完全ながらも一つになる……どんな結果であれ元の存在は消える……

「構わない……どんなことでも……耐えてみせる……！」

『……本当にいいのか？』

俺の名前は適当に付けたからともかくしてお前の名は親から貰った

んだろう？。言い換えれば捨てることになるぞ？』

「……どんな存在になろうとも…俺は俺だそれは変わらない……変  
わらせない！」

『ふん……そうだな。血を出せとつと始めるぞ』

「ああ……！」

紅と零はお互いの指を軽く切った

『面倒な詠唱はいらない

只、お互いの血を同時に落としたら俺とゆう存在とお前とゆう存在  
を一つにする儀式が行われる……いいか？』

「もう決めたことだ俺はもう逃げない！」

紅と零は同時に自分の血の雫を落とした

ピチャン……

独特の水の波紋を作りその波紋はこの壁なき世界の中で透き通っていった

「……………ぐっ!？」

『ちっ…………きた…か!』

突如二人の体に激痛が走った。

この激痛はお互いが反発している痛み…和らげることも無い拷問のような苦しさ

「うっ…………」

『ぐっ…………が…』

ボタン！

二人は同時に意識を無くし倒れた。  
壁なき空間はただ無限に唸り透き通っていった





闇の黒と光の白の空間は交わり虚無の銀色と化した……その新たな空間の中に“二人”の影があった

「うっ……」

『ぐっ……』

二人は小さく唸りゆっくりと立ち上がった

「……えっ?」

『……はっ?』

二人はお互いを始めて見た。見えるのはお互い全く同じ黒髪、右目は赤色、左目は青色に顔は瓜二つだった

「……お前……?」

『だろうな……』

……お互いを名前で呼んだ筈なのに何故か雑音が混じった様に名前の部分だけ聞き取れなかった

「……なあ……何でお前の名前が発音出来ないんだ?」

『言った筈だ俺とお前、二人の存在は消えると』

「じゃあなんで今その両方が存在しているんだ?」

『知らん……俺も始めてだったからなどんなことが起きるか全く予想つかん』

「兎に角名前が言えないのは不便だな……」

『恐らく破壊神辺りでも発音出来ない聞こえないだろな』

「俺はそれじゃ俺は……これから“零崎 紅夜”と名乗るよ」

『新しい名前か……それじゃあ、俺は“紅天 紫零”だ』

「……っ……!」

『……くっ……!』

二人は体に異常が調べようとしたとき突然体に紫電が走ったような痛みが二人に襲った

「なっ…な…に…これ…!!」

『恐ら…く…無理矢…理…繋…が…た…デメリツト…だろ』

二人は暫く激痛に耐えるといきなり体に走っていた痛みが嘘のように消えた

「ハア…ハア…ハア………」

『治まった…か…』

「結局何だったんだあの痛みは？」

『分かりやすく言えば発作のようなものだろうな』

「……他に俺達に以上は？」

『……見てみろ』

紫零は指先を軽く切った

「?……何なんだ」

『俺達は不老不死だ。更に普通の不老不死とは違い回復力、再生力が異常に高いこの程度なら治るために一秒も係らんが……』

紫零は服で切った部分の指を拭いた……

『回復力、再生力が極限に落ちている……人間より少し高いぐらいだろうなこれは』

傷ついた指は変わらずそのままだった

「……ちょっと苦しいな」

『その分身体能力は上乘せで上がっているぞ』

「他には無いのか?」

『少しは自分で考えろ……まずこの空間から出ないと分からないな』

「……………分かった」

『ああ……………それとやることもある』

「何だ？」

『修業だ…俺が直々にお前に俺の技術を叩き込んでやる』

「……………why？」

『仮にもお前と俺は繋がったんだ……………お前が負ければ俺も負けたことになるからな……………何でも耐えるんだろ？』

その時、紅夜は思った……………こいつ恐らくじゃなくて絶対ドSだ……………と

「……………ハイ」

『それじゃあ……………精々足掻けよ！』

こうして紅夜の修業（地獄）が始まった。

……頑張れ紅夜

## 第十二話：零崎 紅夜と紅天 紫零（後書き）

作者「今回のゲストはこの小説で副主人公でも主人公でもある史上最凶少々鬼畜な破壊神……夜天 空様です！」

空「……鬼畜か？俺」

作者「所々見え隠れしていると思います……自分は」

空「……まあいいや……今は」

作者「ブルツ（寒気）とっ……とりあえず質問デス……空は超が付くほどの美少Z Y「バキッ！」……訂正美少年でした」

空「♪」（近くにあった大木をへし折った）

作者「（怖あ……）とりあえずズバリ！貴方の強さの秘密は何ですか！？」

空「強さの秘密ね……努力とかかな？」



作者「……努力で？」

空「努力で」

作者「……………そうですか」

空「何を求めてほしかったの？」

作者「きっと、面白いことを言ってくれると信じた私が愚かでした  
すいません」

空「……何かムカつく」

作者「とりあえず次回は空の使い魔紹介をしたいと思います」

空「それが終わったらやっと本格的に東方の世界？」

作者「そうなりますね……」

空「所でさあ……作者さん」

作者「はい？」

空「ゲームの方はどう？」

作者「……未だに紅魔伝、妖々夢、永夜抄、花映塚、風神録、地霊殿、星蓮船をノーマルでノーコンクリア出来ません！」（泣）

空「あゝゝ……どんまい？」

作者「クヤシイです！」

空「あんま……面白くないよ」

作者「そんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！」

空「えゝゝ、作者さんが壊れましたなのでこれにて後書きは終了させていただきます。次回も見てください」

作者「チェリーパイ」

空「欧米か！」

バキッ！

作者「あびしっ！」

／ピチャーーン／

## キャラクター紹介2（前書き）

作者「空の使い魔、イクス、アリア、ティムの設定です。  
少々ネタバレがあります」

## キャラクター紹介2

イクス

身長.. 180 cm

体重.. 64 kg

年齢.. 空よりちょっと年下らしい

種族.. 神（邪神）

能力.. 暗黒を司る程度の能力

別の世界で邪神をしていたがとある理由で空の使い魔になった。

何時も執事服を着ていて家事ならば何でも完璧にこなす正に完璧人。常に冷静沈着で空の使い魔を何億年もしてなお未だに驚いた顔を見たことがないらしい。

主の空に対しては絶対服従で何時も自分のことは二の次である。

邪神と同時に世界神の使い魔であるイクスその実力は実は龍神をも凌ぐほどだが空は代々のことは自分でやるのでイクス本人が戦うことは滅多に無い。

暗黒を司る程度の能力でありとあらゆる闇や影を操ることが出来る

その為、日夜問わず弱点は無いに等しい。更に闇や影で世界一つを覆うこと可能……更に暗殺拳を得意で影から影闇から闇へ弱点らしい弱点は無い為、非常にやりにくい。

性格は真面目で常に主人である空を第一に考えている。

バイスロスト（愛称はアリア）

身長…167cm

体重……氷像（ブルッ！）

年齢…秘密です

種族…龍（天神龍帝）

能力…天空を司る程度の能力

空の使い魔で《天神龍帝》と言う色々な世界の中でも最強クラスの龍。世界神に憧れを持っており偶然出会った空に心を奪われ（一目惚れ）そのまま使い魔になろうとしたが空に与えられた試練をクリアすることが出来ず一度は挫折しかけたがもう一人の空の使い魔ティムに出会い彼女も空に惚れていることを知り負けるものかと必死で努力した結果晴れて空の使い魔なれた。

常にロングスカートのメイド服を着てイクスと少し劣るが家庭万能。空にどっぷり惚れており妄想癖が異常に酷く妄想の世界に何度かトリップすることもしばしば  
実力は龍神より劣るがそれでもかなり強い。しかしイクスと同じ理由で戦うことは滅多に無い

アカムトルマ（愛称…ティム）

身長…178cm

体重…：灰塵（ブルッ！）

能力…大地を司る程度の能力

種族…龍（轟覇龍皇）

年齢…：覇龍獄閻撃！（ピチャーン）

空の使い魔の一人で強い奴を求めて旅をしていたとき空に偶然に会い勿論ティムは空に勝負を挑んだが圧倒的強さで空が圧勝、自らの強さに自信と誇りを持っていたティムは酷く落ち込んだ。

その後、悔しくて悔しくて空に何度も勝負を挑んだが全敗だがティムは次第に空の強さに惚れていき空もティムが気に入りティムは空の使い魔になった。今はすっかり空にベタボレでイクスとは師弟関係アリアとは永遠のライバル（恋の）

実力はアリアと全くの互角

因みに料理以外なら何でも出来るがティムの料理は神殺しの料理と

ゴットキラークッキング

恐れるほど下手くそ



**第十三話..とりあえず飛ばして修行終了(前書き)**

作者「かゝなり飛ばします」

### 第十三話…とりあえず飛ばして修行終了

「憐魔皇嵐閃！！！」

『天覇烈闇刃！！！！』

とある白と黒が混じった銀色の空間の中で幾つもの斬撃とそれを圧倒するような巨大な斬撃がぶつかる

『中々なるようになったじゃないか！！！！』

「お前に死の一步手前ぐらいまで毎度毎度痛み付けられていたら…  
…嫌でもこうなるよ！！！！」

『お前には死んでも強くなってもらわねえと俺が困るんでねえ…  
終雷剣！！』

黒い稲妻を放った人物は昔、十六もの世界を喰らった鮮血の殺戮者  
夜天 零改めて“紅天 紫零”

「そうかよ！……天雷剣・素戔鳴尊！」

超特大の稲妻を放つ人物は紫零の元となった心に凶悪な闇を宿した心優しき少年幻影の現人神紫乃崎 紅改めて“ 零崎 紅夜”

二人はこの長い数万年とゆう長い時間をずっと死合い（誤字あらず）してきた。

最初は何時も紅夜がやられていたが徐々に強くなっていき今では紫零の本気にも打ち合う程となっていた

『今日はこれで最後だ。殺す気で来い！！！！』

「言われなくても！」

紫零は大剣、紅夜は刀を持ちお互い魔力を自分の武器に溜め込んでいった

『神をも殺す死の極光……！！』

「天地焼き付くす……炎帝の剣！」

『神殺死光破！！！！』

「紅蓮炎帝斬！！！！」

二人の技がぶつかり辺りは紅い炎と赤黒い極光に包まれた



「イタタ……」

『フン……』

手を押さえ痛がる紅夜を目の前に紫零は静かに手に持っていた大剣  
“終死”をしまった

『しかし……お前もやつとマシになってきたな』

自分を治療し終わった紅夜に紫零は呟いた

「……そうかな？」

『最初は才能と力だけある雑魚だった……がよくここまで成長した  
ものだ』

「相変わらず手厳しい言葉を……ありがとう」

『ああ……そうそうお前今日で現代に帰れ』

「……………はっ？」

『お前も最低限の力を手に入れたからな帰れ……正直メンドクなってきたし』

「本音が聞こえるが……分かった。俺もそろそろ空達に会いに行きたいしな」

『最後に一つ……』

「!？」

紫零は紅夜と顔をお互い顔がぶつかるほど距離まで一瞬で移動した

『修行する前に……言ったこと覚えてるか?』

「……………ああ」

こいつとの契約……もし俺が“零崎 紅夜”が戦いで負けた場合……体の所有権をあいっ“紅天 紫零”に渡すこと。更にその時のみ“何をしても構わないこと”……制限時間は20分と決められているが……暴食の魔眼が無くてもこいつは殺戮者……殺戮をするために生きている奴だ。何をするのか容易に予想できる。

『分かってるならいい……それじゃさっさと行ってこい』

「……じゃあな」

『ああ……』

そして俺は……長いような短いような地獄の修行を終え  
遂に現代に帰ることになった。



「……とゆうことだな」

目覚めていればあの封印洞窟の中だった。

「ふう……」

……自然の味？

まあ……かなりいい気分だ

こんなに空気って美味しいんだ……

『おい……』

「……何？」

久しぶりに吸った自然の空気を少し満喫していると突如頭の中に声が響いた。

『一つ言い忘れていたがお前にある程度リミッターを掛けさせてもらった』

「はっ!？」



『今のお前じゃそこらの妖怪じゃ一瞬で殲滅出来るからな……それじゃ俺はつまらない……よって魔法等の術式は全て封印させてもらう』

めちやくちやだな

「……闇の刻印は？」  
エレボス・カーブ

『それもだ……まあお前今眼帯を付けているだろ？』

「……確かに」

右目にいつの間にか眼帯が付けられていた

『それを外せば一時的に全てのリミッターは解除できるがそれと同じくお前の体に俺も入るからな……いきなり強くなれるがその分体が崩壊しながらの戦いになる……まあ気が向いたらリミッターを解除してやるよ……じゃあ後は適当にやれ』

「いいたいことだけ言って消えやがった……はあ」

とりあえず軽く下級の魔法を使おうとするが……うんともすんとも  
言わなかった……あいつ……絶対いつかボコってやる

「よし……それじゃ帰るか」

ゆっくりと立ち上がり紅夜は出口に歩き出した。

………

………

………

………

「さてと……どうしようか……」

### 第十三話..とりあえず飛ばして修行終了(後書き)

作者「すいません中間テストで今まで更新出来ませんでした。!!」  
「!!」

## お知らせ

ここまでこの小説家を見ていただいた読者様  
今まで読んでいただいた読者様

申し訳ありません。この小説東方神々録は永久凍結することに決定  
しました。

理由は自分じゃこの小説をこれ以上書けない。  
自分は駄文しか書けない。  
物語の順序がめちゃくちゃ

等の限界を感じてしまいもうこれ以上書けません。

本当に申し訳ありません。

最後に斬王@殺神様コラボも出来そうにありません。  
今まで読んでいただいた読者様。本当に申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4588n/>

---

東方神々録

2010年10月21日19時03分発行